

「シェイクスピア戯曲における死の表象と民衆文化」

國崎倫

16-17 世紀のロンドンにおいて、ペストの流行を直接的原因とする死への恐怖は、民衆の生活や精神活動に影を落としていた。ロンドンを含めるヨーロッパ広域を長期間脅かした疫病流行について当時の民衆が共有した社会通念は、木版画、銅版画、教会のステンドグラス、フレスコ画や彫刻、寓意詩などにおいて多種多様に表象されている。ペストがエリザベス朝・ジェイムズ朝イングランドの日常において馴染み深い概念であったことは間違いないが、不思議なことにシェイクスピアは、ペストで苦しむ人物や、感染死者の臨終の様子だけは一度も表現しなかった。本論文は、シェイクスピア戯曲においてペスト罹患の場面が上演されなかった理由について考究する。

本論を貫くテーマは「死」の概念である。「死」の反意語は勿論「生」であるが、エネルギーが放出される機会となる祝祭も、生命力に満ち溢れていることから、死と二律背反の関係にあると本論は考えている。さらに本論は匿名の歴史的資料の分析に力点を置いている。資料に個人名を残すことのない民衆にとって最大の関心事であった生と死を考える上で、歴史的な一時資料は必要不可欠であり、シェイクスピア戯曲の社会的役割と、劇場における需要供給の関係を読み直す鍵となる。ペストが舞台演出においてどのように取り上げられたのかについて、本論は独自の考察を展開する。

本論は2部構成である。第1部「死の受容形態と民衆文化」は3つの章から成り、16-17世紀に出版された死と疫病に関する記録や印刷物、木版画やブロードシートなどの歴史的資料を文学作品の背景として扱いながら、その社会的・文化的意義について考察する。第2部「シェイクスピア戯曲における死表象」は4つの章から成り、シェイクスピア作品において疫病と死が民衆文化と関わる形でどのように表象されているかについて、当時の匿名印刷物と共に論じている。

第1章「恒常的な闇と死亡週報考」では複数枚の死亡週報を考察することにより、ペスト禍が先行研究の示す期間よりも長く続いていた可能性を指摘する。死亡週報の種類・形態、刊行目的、発行プロセス、記載内容を考察した上で、本章では主に3つの点に注目する。まず、E・K・チェインバーズの示す疫病期間の記録には追加すべき点があること、次に、死亡週報とは無機質な数字の集合体ではなく、社会的利益や人間関係に影響を受けるビジネスであったこと、そして、死亡週報が「ペスト感染死者数ゼロ

名」と報告する年にも疫病が発生していた可能性を確認できることである。

第2章「擬人化された死」では、民衆が不可避の死を受容しようと努めた精神活動について考察する。民衆は必ずしも死を恐れるべき敵として憎んだわけではなく、死を代弁者として味方につけ、不平不満や願望を吐露することに活かした。擬人化された死の語る言葉は痛烈な社会批判を含んでおり、聖職者が説いた宗教教義と比較することにより、民衆の抱いた本音が明らかとなる。死が語る科白は当時の共通概念として捉えることができ、第2部で考察するように、これらはシェイクスピア戯曲に反映されているのである。

第3章「死の舞踏」では、16-17世紀イングランドのペスト禍を背景とした「死の舞踏」図と寓意詩を考察し、死表象と戯曲との相関関係について論じる。複数の作品に共通して確認できる特徴は常套句として表れており、西欧の土葬文化圏における「土」と「肉」、再生への寄与と言った有機物の循環を語るものとして、シェイクスピア戯曲の中にも共通の概念として取り込まれているのである。

第2部「シェイクスピア戯曲における死表象」では、第1部で確認した疫病と死に関する民衆文化がシェイクスピア戯曲に反映されていることを論じる。

第4章「死と『さかさま世界』:シェイクスピア戯曲におけるこども一転覆と再生一」では、イングランドの祝祭空間における「さかさま世界」を背景に、シェイクスピア戯曲に登場する幼子が祝祭的痴愚の役割を担っていることを指摘する。第1章で行った「死亡週報考」より、16-17世紀イングランドにおける幼子の埋葬件数は著しいと確認できるが、シェイクスピア戯曲に登場する夭折は特別な象徴性を有している。ここでの「こども」は美德を欠いた公的世界の恐怖や規則に理解を示さず、束の間の「さかさまの世界」において真実を述べる祝祭的痴愚の役目を担っているのである。このようにシェイクスピア戯曲特有の「こども表象」について、同時代の他の劇作家との比較を交えて論じる。

第5章「死と祝祭:『ハムレット』におけるモグラ一土と循環一」では、『ハムレット』1幕5場、王子ハムレットのまえに現れる先王の亡霊が“mole”(1.5.162)と呼ばれることへの違和感に着目する。同時代の文化的・歴史的資料をもとにモグラの含意について考察し、『ハムレット』におけるモグラ表象の意味を解明する。盲目性は死を表象する際に不可欠な概念であり、モグラは死の^{イデー}理念を物質化、身体化するに適した存在であったと考えられる。戯曲『ハムレット』は16-17世紀ロンドンで既に流布していた「死

の舞踏」に影響を受けた作品であると指摘する。

第6章「死とナショナリズム：『ジョン王』における諸外国への意識」では、ペストが国民のナショナリズムを扇動する媒体となり得たことを論証する。2幕1場、アーサーの母コンスタンスの科白には、“plague”、“sin”、“punish”といったペスト関連語句が多用されている。当時の印刷物を確認すると、イングランド国民にとって疫病とは国内で自然発生したものではなく、交易や戦争を繰り返す近隣諸国を經由して国内へ取り込まれた災難であるとの印象が強い。特にフランスに対する被害者意識や排他的姿勢は、ナショナリズムにまで昇華され、戯曲の科白に組み込まれている。また、国家体制としても、ペスト禍において市民が抱く不平不満を鎮めるための捌け口を求めていたと考えられ、ペストとナショナリズムを上手く結びつけて、怒りや鬱憤を国外へ向けて発散させようとする仕掛けに相乗りの状態であった可能性を指摘できる。民衆の日常生活におけるペストについての共通認識が作劇に利用された結果、遂には疫病が商業的發展へと繋がった点について指摘する。

第7章「死と誓言：『フィラスター』における宗教的な死の受容への反発」では、劇作において表面化した民衆の感情を確認する。疫病が流行すると聖職者はペストが「神罰」であると説いた。そのように教えられた民衆は、神への許しを請うべく祈祷やお布施に励んだが、災禍は去らなかった。宗教が可能とする救済の力に限界を感じた民衆の中には、苛立ちを隠さず、生活を改善するため、自発的な努力を発揮することに価値を見出し、神への信仰を疑う者が出た。これに対し、舞台上で宗教を愚弄する役者たちの行為を制圧しようとした英国議会は、関連する法令を二度施行した。ここに見られる宗教的束縛と解放、または執着と無関心という双方の「いたちごっこ」は、戯曲の科白において、誓言に関連する異同の頻出として現れているのである。このことを論じるに相応しい具体例として、1634年出版『フィラスター』第4四折本に確認できる19か所の異同を考察する。

シェイクスピアは、当時の劇場の社会的役割を考慮した上で、舞台上でペスト感染時の症状や最期を再現しなかったのである。ペスト禍において劇場は、民衆へ精神的浄化作用を与えるシェルターとしての機能を有しており、ペストによる被害を直接舞台上で再現したところで劇場には観客が集まらず、興行収入は期待できなかったと考えられる。シェイクスピアは劇中、ペスト災禍を全く描かなかったわけではない。万人を相手とする劇作家は、ペストという時事問題を間接的な表現にとどめることで、劇場を安定的に経

論文要旨

営することができたのである。

イングランドにおけるペスト流行は、疫病と死を恐れた人間の思いを可視化する表象文化を様々に生み出し、演劇の社会的役割をより明確に示すこととなった事件と言えるだろう。シェイクスピア没後 400 年が経過した今でも、16・17 世紀ロンドンにおいて印刷された無名の歴史的資料、一次文献の分析はシェイクスピア戯曲と当時の社会における需要供給の関係を読み直すに必要なプロセスであると言えよう。死表象を多く含む民衆文化において、死を見つめることは、生への希望を見つめることに等しい。文学研究における逆説的な読みを可能にしてくれる意義深い資料として立ち現れてくるのである。